

|             |                                          |
|-------------|------------------------------------------|
| 氏 名         | 片 山 勢 津 子                                |
| 学位(専攻分野)    | 博 士 (学 術)                                |
| 学 位 記 番 号   | 博 乙 第 92 号                               |
| 学位授与の日付     | 平成 13 年 3 月 26 日                         |
| 学位授与の要件     | 学位規則第 4 条第 2 項該当                         |
| 学 位 論 文 題 目 | 17 世紀のパリの邸館の変遷と室内装飾の発展に関する研究             |
| 審 査 委 員     | (主査)<br>教 授 河 邊 聰<br>教 授 西村征一郎 教 授 日 向 進 |

## 論 文 内 容 の 要 旨

本研究は、インテリア様式が確立したと言われるルイ 14 世様式の成立背景を、17 世紀にパリに建設された邸館の変化を追うことによって明らかにしようとしたものである。

論文は、5 章から構成されている。

第 1 章では、ルイ・サヴォの建築書を資料として、当時の住宅建築がどのようなものであったのかを考察している。建物の構成に身分が反映していて、身分の上位のものが下位に影響を与えることが基準にあったとしている。また都市と地方において建物配置に違いはなく、シンメトリーが使われ、プロポーションが重視され、道路からの外観を重要視していたこと、部屋配置の形式にフランス式の単列配置とイタリア式の二列配置があること、部屋の用途は固定されていないことを明らかにしている。

第 2 章では、17 世紀にパリに建てられた邸館について考察している。アンリ・ソーヴァルの建築書とその外の建築の図面及び地図が参考にされている。建築の構成を検討することに併せて、当時の人々の邸館に対する評価についても分析している。邸館の平面の基本は、イタリア人建築家セルリオ (1475-1554) が設計したル・グラン・フェラルを基本としていたこと、後に室内重視のデザインがなされるようになり、部屋の配置が二列配置に変わっていくことを明らかにした。

第 3 章では、ランブイエ邸とサロンについて考察している。ランブイエ邸は、サロン開設のために夫人自らが計画案を作り旧邸を改築したと言われるもので、フランスにサロンを広める契機となったものとされている。このランブイエ邸に注目し、建物の図面が現在残されていないことから、申請者は平面図の復原を行っている。それをふまえて、サロンの流行に伴って室内空間が重視されるようになり、邸館が変化したと考察している。

第 4 章では、当時の書物の図版から邸館内部の部屋の構成と室内装飾について考察している。室内空間の変容を追いながら、建築の平面構成と室内装飾との関連性について考察している。17 世紀中頃から、室内装飾の傾向が変化し、実用的に考えられてきたものが装飾化すると指摘している。

第 5 章では、インテリア様式が形成された 17 世紀フランスの社会背景について考察している。身分階層の生活様式は、公的・社会的な生活に特徴があり、サロンが開かれた邸館では、部屋の広さ、数、階段の形式、暖炉の有無などに身分が反映されていた。その一方サロンでは階層にかかわらない横社会が形成されていたが、結局はサロンで培われた上品な振舞いが階層の相違を際立たせるものとなったと考察している。

## 論文審査の結果の要旨

インテリア様式とは、ヨーロッパにおいて歴史的に形成された室内の様式のことである。今までは、様式形成の過程についての研究はさほど多くない。本研究は、17世紀初期に出版されたルイ・サヴォの建築書、「フランスの私的建物」(L'ARCHITECTURE FRANÇOISE DES BASTIMENTS PARTICULIERS) (1635年、パリ版) を読解した上で中心資料とし、更にアンリ・ソーバル (1620-69 or 70) の「パリの史的研究」(Histoire et Recherches des Antiquité de la Ville de Paris) を資料として、当時の上流階級の住宅建築について考察している。その上でインテリア様式が純粋芸術とは異なり、当時の人々の室内での行為との関係の中で形成されたのではないかという見解を示している。当時の上流階級の社交生活を反映する形でインテリア様式が整えられていくことを、サロンを発展させたことで知られるランブイエ夫人に注目し、ランブイエ邸にかかわる資料から、どのようなサロンが開かれ、そのためにどのように室内が設えられたのかを考察し、併せてランブイエ邸の平面を復原考証している。

室内装飾の手法は、17世紀中頃に変化するが、それは建築の平面構成の変化に呼応したものであることを明らかにしている。建築の平面構成は、邸館が城館型から都市住宅型へと変化したと捉え、また室内装飾が、部屋を多目的に使用する中世的生活形式から近世の宮廷貴族の生活様式に適應するものになっていったとし、部屋の用途分化に伴って、室内の装飾化、形式化が進んだと結論づけている。

以上の成果によって、17世紀フランスの邸館内部の室内装飾の特質を理解し、インテリア様式成立の基本にかかわる幾つかの新しい知見を得ることが出来たといえる。従来の建築歴史が扱ってきた建物についての研究の範囲を超え、建築と人とのかかわりの中で空間を捕らえるという現代的要素を持つ研究として評価したいと考える。

本論文の中心をなす論文のうち、次の2報が公表済みである。

○片山勢津子、「17世紀フランスの住居の構成とその変遷—ルイ14世様式の成立の背景 その1」、日本インテリア学会論文報告集、4号、1994年、pp.41-48

○片山勢津子、「同上 その2」、同上論文報告集、5号、1995年、pp.75-82

現在審査中のものとして、片山勢津子「ルイ・サヴォの建築書に見られる17世紀フランスの邸館建築」、日本建築学会計画系論文報告集、1編がある。その他大学の紀要に投稿したもの2報がある。